

一乗谷朝倉氏遺跡のトイレ遺構

戦国大名「朝倉氏」5代の城下町として知られる福井県「一乗谷朝倉氏遺跡」は、「トイレ考古学」に先鞭をつけた遺跡としても注目できる。すなわち、1968年以來の調査で、領主の館や武家屋敷、町屋、寺院などの跡が広範囲にわたって発掘されたが、武家屋敷や町屋の多くには、敷地の一角に土坑状の石組遺構が設けられていた。それが何か。調査者らの間では、早くから「トイレだろう!？」との想定が、ささやかれていた。そして1979年、まさしく遺構の中から「金隠し」が発見されるにおよび、その想定は大方の認めるところとなった。考古学的な材料だけで、発掘遺構を「トイレ」と断定した、わが国最初の事例である。ただし、その判定過程に自然科学的な検証を欠いている点に、不確実さも内包する。

他方、トイレ遺構の判定には、寄生虫卵分析を中心とした堆積土の自然科学的分析によるのが、現状では最も有効である。一乗谷朝倉氏遺跡の場合も、その手法が開発された1992年以降、早い機会での検証が望まれたわけであるが、ようやく1997年3月に至り、福井県埋蔵文化財調査センター岩田隆氏らの協力によって、石組遺構内の堆積土を入手することができた。そこでトイレ遺構を共同研究してきた天理大学天理参考館金原正明氏らに分析を依頼したところ、土壌は「人の糞便の堆積であるとみられる」との結果が得られた。まさしく石組遺跡は、先人の想定どおり「トイレ」だったのだ。こうして永年の懸案に、一つの科学的判断を下すことができた。以下に、発見遺構や分析結果の概要を紹介しておこう。

土壌を採取した遺構は、県道の拡幅工事に伴う調査(第84次)で発見された0.8m四方、深さ0.3mの石組遺構(図38)で、石組みの上部はすでに削平を受けていたが、内部には有機質を多く含む黒い土が堆積していた。それに気づいた調査担当者の岩田氏は、「便所かも知れないと判断し、表面を削って中程の土を密封容器に採取した」。なお、この遺構からは、越前焼の甕や壺、土師器皿、鉄釉壺、銅銭、笏谷石などが出土している。この石組遺構が発見されたのは、館跡のある「城戸ノ内」の外(南)側約400mの地点であるが、隣接地に足利義昭が滞在したと伝える「御所・安養寺」の地名が残るから、こ



図38 発掘された石組トイレ遺構

こも城下町の一画に含まれると考えてよいだろう。ただし、遺跡全体に削平が激しく、敷地や建物とトイレの位置関係が十分に把握できないうらみは残している。

一方、土壌については、寄生虫卵・花粉分析・種実同定について分析し、いずれも興味ある結果が得られた。すなわち、寄生虫卵に関しては、多量の回虫卵・鞭虫卵と、ごく少量の日本海裂頭条虫卵・マンソン裂頭条虫卵が検出され、それらが土壌に含まれる密度は、1当たり約13,000個ときわめて高い。この一つを取り上げても、採取土壌は人の糞便そのものといえるだろう。また、肝吸虫卵や横川吸虫卵が全く見られないことから、淡水魚を摂食する機会は少なく、むしろ寄生虫感染の少ない海水魚を好んで食べた食生活が想定できるという。ちなみに遺跡は、三国港から約30kmの内陸にある。

花粉および種実の分析に関しては、雑穀類、コメ・ソバの穀類、ミズアオイ(水葱)・ウリ類・ナスの野菜類、キイチゴ属・クワの果実類の食用が確認された。また、周囲には、ナデシコ科やカタバミ属など乾燥を好む人里植物が育成しており、樹木ではニヨウマツ類、クリあるいはシイ属、エノキ属あるいはムクノキの生育も復元された。こうして分析の結果、「回虫卵と鞭虫卵を主に寄生虫卵の密度が高く、花粉群集と種実群集において食用となる分類群の占める割合が高く、人の糞便の堆積であるとみなされ、石組遺構が便所遺構である蓋然性が高いことが」指摘できたのである。

しかし、一乗谷朝倉氏遺跡の「トイレ」探しは、これで終わったわけではない。敷地内に複数ある石組遺構のすべてがトイレという確証もない。敷地や建物との配置関係を十分に把握・整理しきれていない現状では、石組遺構個々に対する自然科学的分析を積み重ねる必要がある。今後の継続的な取り組みが重要である。(黒崎 直)

参考・引用文献 岩田隆「一乗谷朝倉氏遺跡の便所遺構について」／金原正明・正子「一乗谷朝倉氏遺跡第84次調査における石組遺構に関する自然科学分析」(『紀要1999』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2000)